看護大学教員による医学中央雑誌 Web 版の利用と今後への要望

片平　伸子*
新潟県立看護大学

Ⅰ．はじめに

我が国においては，少子高齢化の進行，疾病構造の変化，医療の進歩および人々の健康や療養の考え方の多様化といった社会の変化を背景として，看護基礎教育の大学化，大学院の開設，専門・認定看護師の増加が急速に進んでいる。平成 3 年にはわずか 11 校であった看護系大学は平成 24 年の時点で，211 校に増加し，修士課程 141 校，博士課程 71 校[1]と，看護教育の高等化，研究機関の増加が示されている。

平成 23 年度に行われた，大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会の報告[2]をみると，学士課程において育成するべき実践能力として「根拠に基づいた看護を提供する能力」があり，その卒業時の到達目標として「看護実践において，理論的知識や先行研究の成果を探索し活用できる」ことが挙げられている。

また，専門看護師は，がん看護，老人看護，家族支援など 11 分野に 1,044 人，認定看護師は，救急看護，皮膚・排泄ケア，感染管理など 21 分野に 12,534 人が，それぞれの課程を受講の後，筆記試験等の審査を受けて認定されている[3]。認定看護師・専門看護師は高い水準の看護実践とともに指導やコンサルテーション等を行う役割を担っており，活動の根拠となる研究成果の探索が重要である。また，専門看護師は研究成果の生産者としても重要な役割を担っている。

試みに，医学中央雑誌 Web 版（以下，医中誌 Web）における「看護文献」タグの付与された文献数および総文献に対する「看護文献」の割合の推移を調べてみた（いずれも会議録除く）。その結果，2001 年までは右肩上がりに文献数，割合ともに増加し，その後一定範囲で増減を繰り返した後，2012 年に再び増加傾向を見せており，看護研究活動が活発に行われていることが示唆される（**図１**）。

これらのことから，看護分野においては，教育・研究

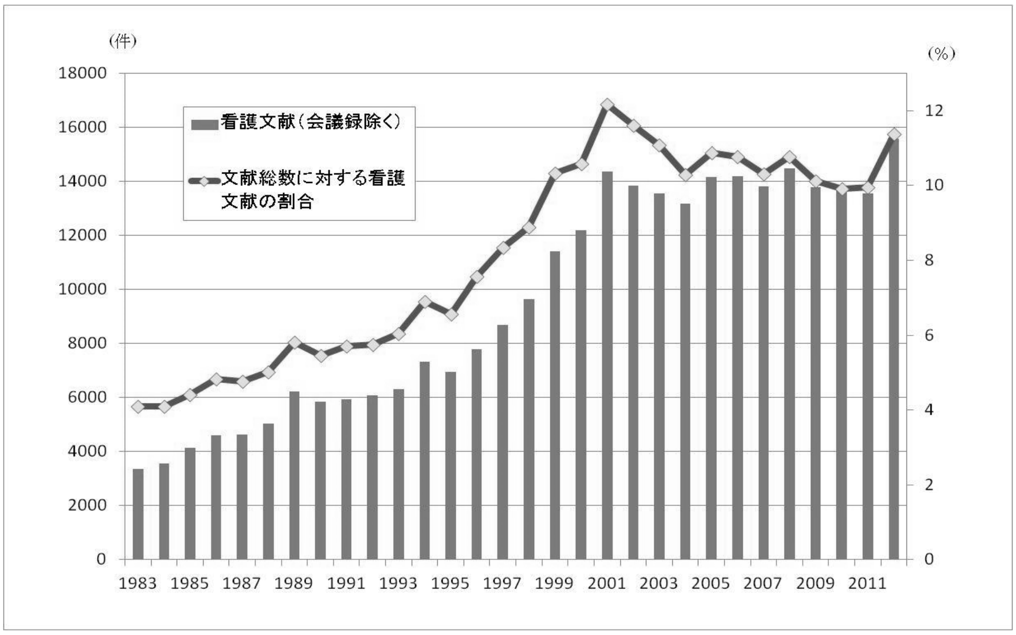

図１　医中誌 Web における看護文献数と割合の推移

Nobuko KATAHIRA：〒943-0147 新潟県上越市新南町 240 番地.
katahira@niigata-cn.ac.jp
（2013 年 12 月 13 日　受理）

機関，臨床のいずれにおいても研究成果の探索の機会や重要性が高まっていることがわかる。筆者の所属する新潟県立看護大学においては，学部生は「基礎ゼミナール」や「看護研究法」，「専門ゼミナール」といった科目の際に医中誌Webを利用して文献検索を行っている。また，大学院生（修士課程）は「看護研究法」において検索演習を行い，その後，学生自身の研究課題や実践課題に関する文献検索を個々に行っている。

筆者は，訪問看護師としての経験をもとに在宅看護について教育・研究を行うとともに，愛知淑徳大学大学院において文学（図書館情報学）の修士号を取得した経歴から，Evidence-based Nursing（以下，EBN）や文献検索について教えてきた。本稿では，看護大学教員としての医中誌Webの利用状況を現在行っている看護教育および看護研究の2つの側面に分けて報告し，今後の医中誌Webへの要望を述べる。

Ⅱ．看護教育における医中誌Webの利用

1．学部教育における医中誌Webの利用（写真１）

学部教育において，医中誌Webを学生が主に利用するのは，4年次の「専門ゼミナール」においてである。この科目は，学生が希望した研究テーマや領域によって決められた看護系教員の指導を受けながら，研究テーマを確定して対象者の選定と研究協力依頼を行い，データ収集，分析，論文作成，学内発表の一連の看護研究の過程を学ぶものである。この科目に先立って，1年次の「基礎ゼミナール」において，文献検索について初めて学び，4年次の「看護研究法」において検索語の選び方や検索範囲の決め方などを教授された上で，学生自身が考えた研究テーマに関連した文献を探すこととなる。そのテーマでの研究の蓄積の有無や程度が不明確な状態であることや，学生自身が主体的かつ集中的に文献検索に取り組む初めての機会であることから，自分が行う研究に活かせそうな文献の獲得の成否については学生間でかなりの差が出る。筆者は毎年4名程度の学生を受け持つが，ゼミ生が行う文献検索の傾向をみると，講義で教えられたシソーラスをすぐに使うことはなく，思いついた言葉を検索ボックスに複数並べることが多い。その上，学生のもつ知識や経験の中では，思いついた検索語に類似した看護用語を捻出することが難しいようで，類義語を連ねたOR検索で有効な検索範囲を広げることも困難である。また，チェックタグの利用も行わず，研

写真１　専門ゼミナール

究対象者の範囲の限定は「高齢者」「母子」などの検索語で行っている。このように，明確な戦略を立てず行う検索を行っているため，検索漏れやノイズが多く，文献検索の当初には「文献がありません」という学生の言葉を聞くことが少なくない。こうした場合の指導では，まず，検索語に何を選び，どのように検索を行ったのかを具体的に聞き出し，文献検索の戦略を一緒に考えるようにしている。戦略といっても，シソーラスの利用，主となるキーワードの選定，不要な検索語の除去，類義語の提案，チェックタグの利用，テーマに合致した論文のキーワードを利用しての再検索，といった図書館情報学の分野においては一般的な方法であるが，これらのうちいくつかを行うと，学生が研究したいテーマに合った論文が見つかってくる。学生の力量や研究テーマによって，検索自体を一緒に行なったり，方法や注意点を伝えて自己学習を促したり，類似したテーマの学生同士で検討させる，といった方法を選んで指導を行っている。

論文の種類や検索年代の限定についても，アドバイスが必要である。「専門ゼミナール」の一環として，文献クリティークを行っているが，そのための文献を探す際には原著論文を推奨する指導をしている。これによって，学生は初めて論文種類の違いを意識付けられる様子である。また，筆者が指導する在宅看護の研究において，2000年の介護保険の開始の前後では制度や環境が大きく変わるため，2000年以前の文献は基本的には推奨せず，新しい年代から遡って文献を選んでいくよう指導している。

なお，前任校では，2年次の必修科目として「エビデンスベーストナーシング」を開講しており，筆者はその中で「エビデンスを探す」演習を主に担当していた。この演習

では，事例から問題を定式化して検索語を選定，医中誌Webを用いた文献検索を行なって，有用と思う文献を選ぶ一連の過程をグループワークで行っていた[4]。2年次前期という早期にEBNについて教えるのは早すぎるのではないかとの危惧を聞くこともあったが，「エビデンスを探す」演習については一定の効果がみられた。

2．大学院教育における医中誌Webの利用

大学院教育において医中誌Webを学生が使って行う授業は，1年次の「看護研究法」である。平成25年度は8名の学生が受講したが，基礎教育において医学文献情報データベースを使ったことがない，あるいは慣れていないという学生が半数以上であるため，医学文献情報データベースとは何かの解説から始め，日本の代表として医中誌Webを使った検索を演習し，海外の代表としてPubMedで演習を行った。シソーラスやチェックタグを説明して，すぐに演習に入るが，前半に講義で学んだことと後半の演習での実践がうまく結びつかない学生も中にはいて，講義内容を振り返らせて検索語の修正案を考えるよう指導を行った。しかし，学部生とは異なり，大学院生は豊富な臨床経験や現場で培った知識から，最初に考えた検索語から類義語を導き出すことは比較的容易にできるようであった。また，大学院生は学部生より自分が探したい文献や研究，課題のイメージがはっきりしていることが多い。このため，具体的な臨床の状況や疑問の起こった背景を聞いてアドバイスすることがあり，こうした指導では，図書館情報学の知識や技術よりも看護研究の知識が役立つ場面が比較的多いように感じた。

さらに，この演習の中では，研究テーマに関連した文献情報を抽出した後，医中誌Webのダウンロード機能を活用した文献リスト作成を指導している。文献管理ソフトの利用者も少ないため，CSV形式でダウンロードし，エクセルファイルとして保存する方法をとっているが，学生はこの方法を覚えて他の講義や演習での課題の文献リストの作成にも役立てている。

3．教員間の勉強会における医中誌Webの利用（写真2）

教員間の勉強会においても医中誌Webを活用している。筆者が所属する地域看護学の領域は保健師教育を中心とした教育を行っており，7名の教員で構成されている。教授内容や教授方法は社会情勢や制度の変化，国家試験の出題基準の改訂，学生の理解度等によって毎年見直しを行っているが，平成24年度は「公衆衛生看護学演習」に関して文献を収集し，担当者を決めて文献の内容と本学で活かせそうなことについて発表し，討議をする勉強会を行った。勉強会をもつことになった契機は以下のとおりである。筆者が「公衆衛生看護学実習」に関する共同研究のための文献を集めていたところ，演習についての文献も多く検索され，それぞれの学校での工夫や教育効果が示されていた。これら，他の学校でのよい取組みを本学の演習に活用できないか検討することを科目責任者に提案したところ，演習に携わる教員全員で共有し，話し合う場を設けることとなった。文献の収集は筆者が担当し，医中誌WebおよびGoogle Scholarを用いて，地域看護学領域の演習についての研究報告を収集した。地域診断，健康教育，家庭訪問，保健指導，健康危機管理等を主題とする19文献が集まり，

写真2　教員間の勉強会

月 1，2 回のペースで勉強会を開き，文献紹介と本学での活用についての討議を毎回 1～2 時間程実施した。その結果，前年度に行った演習について，学習のねらいをより焦点化して内容を変更したり，演習の評価方法・内容を修正したり，指導の場面で教員が強調するべきポイントについて共通認識を得たりすることができた。また，演習に先だつ講義で教えておくことが必要な内容の確認や追加，他の科目への提案を行うことができた。

Ⅲ．看護研究における医中誌 Web の利用

看護研究において筆者が医中誌 Web を利用するのは，まず漠然とした研究疑問や関心についてどんな研究成果があるのか調べる時，次に実際に研究計画を作り，倫理審査申請のための書類や質問紙・インタビューガイド等調査のためのツールを作成する時である。調査データの収集が終わってからは，研究成果を学術集会等で発表する時や研究成果を論文にまとめて投稿する時，投稿原稿の査読結果が帰ってきて原稿の修正を行う時に改めて文献検索を行い，関連する文献を収集する。また，集めた文献や自身の書いた論文の書誌事項を確認したり，転記する際にも医中誌 Web を使っている。

筆者は認知症高齢者共同生活介護や小規模多機能型居宅介護といった，介護職と看護職が混在して利用者のケアが行われる場において発揮される看護の専門性に関心がある。こうした研究テーマの場合，サービスや施設の種類だけを検索語にすると介護職を対象とした研究が多く検索される。検索範囲を看護研究に絞ろうとして「看護」を検索語にすると，「支援」「ケア」「援助」などの言葉で看護を表している文献が漏れてしまう。この問題を回避するため，医中誌 Web の絞込み条件の「看護文献」を利用すると，看護文献の抽出が円滑に行える。これは，医中誌 Web における「看護文献」の分類が雑誌単位でなく，文献単位に変更され，精度が向上したこと[5]が奏効していると考えられる。

また，検索結果の画面から所属の大学図書館の所蔵確認や文献依頼がリンクしているので，和文献についてはあまり手間取らずに文献検索から入手までできることが増えたと感じる。

Ⅳ．医中誌 Web への要望

上述のように，教育と研究の両側面から医中誌 Web を利用しているが，その中で感じている今後の医中誌 Web への要望を最後に述べる。

医中誌 Web で定義される論文種類はもとの雑誌が示した論文種類と異なる場合がある。医中誌 Web の定義の方が緩やかで，例えば，もとの学術雑誌で「資料」とされている論文が医中誌 Web では「原著論文」とされていることがある。医中誌 Web では 1999 年頃から看護文献の原著の範囲を緩和した[6]とのことであった。当時は，看護系の大学が次々と開設され，看護研究者が急増した一方，論文自体の数は相対的に少なかったことが影響しているのではないかと考える。しかし，看護研究者や研究機関が増加した現在では，論文種類は収載雑誌と一致しているのが適切ではないかと考える。特に，自分自身の研究に利用できる研究成果を求めての文献検索では，データベースに収載されている抄録の内容だけでは判断が難しい場合，もとの雑誌での論文種類が判断基準の 1 つとなるが，現在は医中誌 Web の画面上では分からないことに不便を感じている。また，自分自身の論文が掲載誌では「報告」，「資料」とされているのに医中誌 Web で「原著論文」と表示されるのを見ると誤表示のように感じられ，面映ゆい。

医中誌 Web の特徴の 1 つとして，会議録が掲載されていることがあるが，原著論文や解説を探すことはあっても，会議録を目当てに検索を行うことは私自身の研究活動上ではなく，指導の場面においても必要となったことはない。会議録はあくまで学会発表のためのツールであり，発表後，論文化していく中で結果や考察が変わってしまうことも少なくない。学会発表は科学コミュニケーションの場であるため，研究途上での報告であり，その抄録である会議録を他の論文と一緒に扱うことは適当でないと感じる。数が多く，その分作業量も多いと考えられる割に，引用や参考に使われることが少ない会議録についてはデータベースに収載しなくてもよいのではないかと考える。PubMed や CINAHL といった海外のデータベースでも会議録は収載していないことを鑑みても，会議録収載にかかる作業を論文種類の厳密化や，データ更新のスピード化に当てていただけるとありがたいと感じる。

また，「メタアナリシス」の研究デザインタグにも疑問がある。医中誌 Web では，「メタアナリシス」の定義を「ヘルスケアの介入についてのエビデンスを明らかにするために，定式化されたリサーチクエスチョンについて，関連する研究を，網羅的に収集し，批判的吟味をし，統計学的

に解析した論文。ただし，統計学的解析を含まない同様の論文も含む。（中略）ここではゆるやかな定義とし，感度(sensitivity)を高めることとした。」[7]としている。看護文献でこの研究タグをもつ文献は2013年12月現在53件あるが，抄録を見ても，「定式化されたリサーチクエスチョン」の設定や「批判的吟味」の実施に疑問があり，文献検討，叙述的レビューとみなす方が適当と思われる文献が少なくない。Evidence Based Medicine(EBM)やEBNに資するためのタグ付けなのであれば，もう少し厳密でもよいのではないかと感じる。

さらに，最近では「本文あり」と表示される文献も増えたが，実際にリンク先で探すと，当該号はまだウェブ上に無い，ということも何度か経験している。雑誌単位でなく文献単位でリンク付けがされるようになることが望まれる。

少子化の進む我が国であるが，看護系の大学や学部については，毎年新設が続いており，新しい学会も複数生まれていることから，今後も看護研究論文は増加していくと推測される。研究活動においては研究成果の生産と利用は車の両輪であり，臨床に役立つ研究成果の公表は広く求められていることから，生産と利用のあいだをつなぐ，医学文献情報データベースの役割は今後ますます重要になっていくと考えられる。医学中央雑誌の創刊110周年を寿ぐとともに，医中誌Webの今後の発展に期待しています。

引用文献

1) 日本看護協会出版会.看護関係統計資料集〈平成24年〉. 東京:日本看護協会出版会,2013.

2) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告[Internet].http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf[accessed 2013-12-10]

3) 日本看護協会.専門看護師・認定看護師・認定看護管理者[Internet]. http://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/[accessed 2013-12-10]

4) 片平伸子,小山眞理子,竹内淳.看護学士課程における「エビデンスをさがす」演習の評価. 神奈川県立保健福祉大学誌.2008; 5(1) :37-44 . [Internet].http://repository.niigata-cn.ac.jp/dspace/handle/10631/1061[accessed 2013-12-10]

5)医学中央雑誌刊行会. 医中誌Web HELP [Internet]. http://www.jamas.or.jp/web_help5/shibori.html[accessed 2013-12-10]

6) 片平伸子.医中誌Webを用いた日本の看護文献の定量的調査 - 医学文献およびMedlineとの比較から - .日本看護研究学会雑誌. 2006;29(2): 113-118. [Internet]. http://27.50.112.176/test/search/docs/502902002.pdf[accessed 2013-12-10]

7)医学中央雑誌刊行会. 医中誌ユーザー向け情報[Internet]. http://www.jamas.or.jp/user/database/rstug.html [accessed 2013-12-10]